アイルランドからアメリカへ——移民の歴史と経験

佐藤　郁*

1997年に出版された *Ellis Island Interviews : In Their Own Words* は1892年から1954年までアメリカ合衆国の移民入国手続き所として使われたニューヨーク港、エリス島の移民局で働いた6名の人たち、そして移民としてそこを通過した約100名へのインタビューから構成されている。閉鎖されてまもなく半世紀となるため、エリス島の生き証人は年々減り、生存者もみな高齢化している。出版からすでに5年が経つため、その間に亡くなった方もあるだろう。この数十年は地続きのメキシコなどからのヒスパニック系の移民が急増し、移民の7割がニューヨーク港に到着した時代は遠い過去のことであるが、現在でも合衆国の約4割、数にして約1億人の国民の祖先がエリス島通過者であると「自由の女神・エリス島財団」は報告している。

本論では、5名のアイルランド出身者のインタビューを援用しつつ、エリス島の歴史とアイルランドからアメリカ合衆国を目指した移民たちの経験を概観してみたい。

1.「涙の島」エリス島

アメリカ合衆国への移民の統計がとられ始めたのは1820年である。東海岸ではニューヨーク、ボストン、西海岸ではサンフランシスコへの到着者が多く、特にニューヨークはピーク時には全体の7割に達した。1811年、マンハッタン島の先端に建てられたキャッスル・クリントン要塞は、後にキャッスル・ガーデンの名で娯楽施設として使われ、1855年には合衆国初の移民入国手続き所（移民局）となった。しかし、ここも増え続ける移民に対応しきれなくなり、沖の小島エリス島に施設が建設された。正式に開所した1892年1月1日、第1号としてこの島に降り立ったのはアイルランドのコーブ港を発ってきたアニー・ムーアという少女だった。フランス人男性に先を譲られ、この15歳の少女が記念の金貨を贈呈されることになった。彼女はすでに先にアメリカに渡っていた両親に呼ばれるかたちで、2人の弟とともに大西洋を渡ってきたのだった。

この日から1954年の閉鎖まで、ニューヨークに到着した移民は約233万6千人、そのうちアイルランド人は約1,100万人にのぼる。船は自由の女神像（1886年除幕）を自由の国アメリカのシンボルとして仰ぎ見る移民を満載して次々とニューヨークの港に入ってきた。エリス島への上陸者数は、当初1日5千人程度だったが、ピーク時の1907年には3万人を超えた。その数字は事務的にさばける限界の数という意味で、沖にはさらに着船を待つ船が停泊していたという。移民局は1954年に閉鎖され、修復を経て1991年に移民博物館として公開された。現在そこに展示されている当時の風刺漫

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

画（1906年4月17日付け *Evening World* 誌）は星条旗のデザインの上着を着た男性と赤ん坊を抱いた女性のやりとりを描いている。

男性「三つ子だなんて言わないでくれよ!!」
女性「三つ子ですって！4万5千人よ！」

赤ん坊のおくるみには「今週の移民到着者」と、また女性（顔は男）の服のすそには「移民局長官ウォッチホーン」と当時の長官の名がそれぞれ小さく書かれている。移民船の1等船客は船上で行われる簡単な審査でたいていの場合手続きが済み、エリス島に上陸することなくマンハッタンに降り立ったが、移民船の乗客の多くは2等、3等船室の客であった。

サンフランシスコ湾のエンジェル島もエリス島と同様の機能をもち、また、両者とも「涙の島」（"Island of Tears"）という別名を与えられることになった。1920年代には入国審査は出国前に実施されることが多くなり、1924年以降エリス島は主に違法移民の拘留所として使われるようになった。エリス島の記録によると、1892年の開所から1924年までの32年間、一時拘留者は全体の約20%にのぼった。しかし、その大半は1日から数日の拘留者であり、最終的に母国に送還された者は全体の約2%にすぎなかった。しかし、32年間の延べ数に直すと25万人という数になり、「涙の島」という別名を与えられた理由が理解できる。島を通過することを許されなかった理由は、病気、経済状況、身元引受人が来ないなどさまざまであったが、この間、島内での自殺も3千件を数えたのである。

2．1　アイルランド系移民——18世紀まで

アイルランドから北米への移民の歴史は古い。ヨーロッパで最西端に位置するアイルランドでは古くから「ティル・ナ・ノグ神話」とともに海の向こうのアメリカが語られてきた。ティル・ナ・ノグとはそこに住むものが永遠に年をとらない常若（とこわか）の国のことである。12世紀以来イギリスの圧政下に置かれていたアイルランドでは、現世での苦しみをいっとき忘れんとして、至福の世界に思いをはせることも少なくなかったろう。移民が本格化した18世紀以降、ますます現実の新世界と結びつけられるようになったのも当然で、そのためこの伝説は風化せずにアイルランド人の心に生き続けたのである。映画『タイタニック』（1998）でも、脱出をあきらめた母親がティル・ナ・ノグの話をしながら幼い子供らを寝かせつけようとする場面がある。実際タイタニック号には100人を超すアイルランド移民が乗船していた。

また、6世紀の修道士、聖ブレンダンの伝説も、コロンブス以前にアメリカに渡った人物としてアイルランドの人々が誇りにしているものである。さらには、コロンブスがアメリカを発見した際、同乗していたアイルランド人エイヤース（記録が残っており、事実と考えられている）も同様である。

このような単発的な冒険家たちとは別に、長期滞在の「移民」が始まったのは、イギリスが植民を始めた17世紀であった。この世紀に渡米したアイルランド人は5万人から10万人と推定されてい

る。その大部分は年期奉公人や流刑者で、イギリスの植民地でタバコやサトウキビの栽培に従事したが、年期が明けたり、刑期を終えると、帰国するのが通例であった。

18世紀の移民の大部分は、イギリスの政策により前の世紀にスコットランドからアイルランド北部に移住させられてきたスコッチ・アイリッシュと呼ばれるプロテスタントの人々であった。アイルランドに渡ってなお、イギリス政府の重税に苦しめられた彼らは、再び海を渡る道を選択したのである。また、この世紀にはヨーロッパ全体で人口が急増した。医学、衛生、栄養の改善や進歩が要因となって死亡率が低下し、平均寿命が伸びたためである。それと併行してアイルランドでは断続的に飢饉が起き、急増した人口が飢饉によって移民を生むという現象が何度か繰り返された。この世紀には約50万のアイルランド人が渡米したと推定されている。

2．2　アイルランド系移民——19世紀

前世紀の渡米者数50万がこの世紀には8倍の400万となった。最大の要因はアイルランドのみならず、ヨーロッパ史上でも例をみなかった大飢饉（1845—49）であった。実際には大飢饉以前にすでに100万を超えるアイルランド人が渡米していた。それは、ナポレオン戦争（1783—1814）終息後にイギリス、アイルランドを襲った景気後退が要因だった。

大飢饉はどのような戦争よりもアイルランド人の運命を変えたできごとといってよいだろう。1845年夏、主食および主産物であったジャガイモに胴枯れ病という病気が発生し、この年の収穫は例年の半分ほどにとどまった。イギリス政府は貸付金や食糧価格高騰抑制のための補助金を出すなどの救済措置をとるが、いずれも一時的なものに過ぎなかった。公共事業でも、9月時点で3万人だった雇用者が、12月には50万人にまで膨れ上がった。不幸なことに翌年2月には寒波が押し寄せ、チフスや赤痢が流行、最悪の状況となった。1846年夏、今年こそというアイルランド人の切迫した望みは、前年以上の不作という結果によって打ち砕かれ、その秋から大量の移民が始まったのであった。

この不幸の最大の原因は胴枯れ病そのものではなく、12世紀から続いてきたイギリス政府の圧政、冷酷な政策であった。1640年頃には、約6割の土地がアイルランド人自身によって所有されていた。しかし、オリバー・クロムウェルによる制圧（1649）やボイン河の戦い（1690）を経て土地の没収がすすみ、18世紀末には5%にまで減少していた。大飢饉の間、ジャガイモがまったく収穫されなかったわけではない。土地没収によって小作人となったアイルランド人たちは、地主に地代を払うために収穫物を売る生活を強いられていた。農業統計によると、大飢饉期間中もイギリスへのジャガイモの運搬量はそれほど減少していない。収穫物のほとんどが軍隊の護衛つきでイギリスへ運ばれていったためである。胴枯れ病によって収穫量が減ると自分たちの手元に残るもの、すなわち食糧はなくなり、やがて飢えに耐えかねて売る分に手をつけた。

イギリス政府は飢餓に苦しむアイルランド人に救済の手をさしのべることに終始消極的であった。当時のイギリスの新聞も、「だらしない（カトリック教徒の）アイルランド人に天罰がくだった」「慈悲を与えすぎるとアイルランド人の性格がいっそう悪くなる」などと書き立てた。政府は、み

ずからの負担を増やして救済の手を広げることを拒み、地主への課税を増やすという方策をとった。1847年6月に定められた「拡大救貧法」は、抱える小作人の数に応じて地主が税金を納める仕組みになっていたため、小作人から地代が上がらなくなると、彼らを土地から追い出すのが税対策の手っとり早い方法であった。アイルランド全島が似たりよったりの状況で、親類縁者から金をかき集めてこの島を出ていくしか道は残されていなかった。運がよければ追い立ての際、お情けにいくらかの金を渡されることもあったという。

大飢饉（1845—49）の5年間で75万、続く50—54年には98万、55—59年には30万人がアイルランドをあとにしたと推計されている。救貧員の収容者数は、1845年で10万人、48年で30万、49年には93万人、また全島の人口は1841年で817万人、飢饉が始まった45年には850万人だったのが、1851年には567万にまで減っていた。大飢饉期間中には、約100万の人が飢えや病気で死亡したと考えられている。

運良く渡航費を工面できた者にもさらなる苦難が待ちうけていた。まず、イギリスのリバプールまでは家畜輸送船で渡るが、リバプールでは、スリ、サギになけなしの金を奪われる者が後をたたなかった。こうした者たちはリバプールのスラムに住みつき、そこから抜け出すことができなくなった。また、言葉巧みにだまされ売春宿に引き込まれる女性も少なくなかった。このように、渡米の夢を果たせず、リバプールで一生を終えたアイルランド人も多く、「ランカシャー・アイリッシュ（ランカシャー地方のアイルランド人）」という呼称ができたほどである。（当時のリバプールはランカシャー州、現在はマージサイド州に区分されている。）

アイルランドをあとにする移民の急増に応え、1847年からはコークやコーブなどの港から直接アメリカ行きの船が出るようになった。彼らが安い船賃を払って乗る船は、小型で老朽化したボロ船で、ろくに訓練も受けていない船員が乗り込んでいた。食事や居室の環境は最低で、船上で伝染病に罹患する者も多かった。もともと栄養不良の状態での旅立ちであったため、体力の弱っている者が犠牲となり、船上での死亡者は海へ投棄された。当時、船上およびアメリカ上陸後まもなく死亡した者は4割にのぼったというから、彼らの乗った船が「棺桶船」（“coffin ship”）の名で呼ばれるようになったことは決して大げさなことではなく、文字どおり、命をかけた渡米、移民だったのである。

2．3　社会の底辺で

1860年頃、アイルランド移民のアメリカ上陸後の平均寿命は5〜6年と言われていた。何とかアメリカにたどり着いたものの、それまでの栄養不良や病気がたたって、ろくに仕事もできぬまま病死する者も少なくなかった。また、アメリカではまだ新参者であったアイルランド人は、社会の底辺で低賃金・長時間の過酷な労働に耐えるしかなく、それによって、結局からだを壊す場合もあれば、危険な労働そのものにより命を落とすこともあった。

女性は英語ができることが有利に働いて、女中や子守りなどとしてひきあいが多かったが、男性は肉体労働が中心で、危険な土木工事の作業に多くの男性が従事した。アイルランド人男性が多く

従事したことで有名なのは、大陸横断鉄道の建設であるが、「すべての枕木の下にアイルランド人の骨が埋まっている」といわれたほどである。当時、成人男子の黒人奴隷は1人1,000〜3,000ドルで売買されていたが、アイルランド人男性の賃金は1日1.5ドルが普通で、1ヶ月で食事付きの10〜15ドルというケースもあった。黒人奴隷がすでにアメリカ社会において立派な労働者として認められていた一方、体力も体格も黒人より劣り、これといった労働技術ももたないアイルランド人男性は、かような扱いを受けたのであった。軍隊もまた職場の一つして考えられたが、南北戦争時(1861—65)には、二つのアイルランド人部隊が「敵」として戦うという悲劇も起きた。

アイルランド人は英語を話せるという利点があったにもかかわらず、なぜアメリカ社会で底辺からのスタートとなったのか。それには二つの理由があろう。一つは、本国でイギリス人によって支配されていた彼らは、アメリカにおいてもイギリス系移民によって蔑まれたということである。イギリス系移民は当時のアメリカ社会ではすでに一流市民の地位を確立していた。イギリスの政策への不満や宗教弾圧、貧困によって自由の国アメリカへ渡ってきたはずの彼らも、いったん地位を確立してしまったからには、それを危険にさらす気にはなれなかったのであろう。独立してもなお、イギリスに対し「本国」「母国」意識を持ち、劣等感を抱いていた彼らは、アイルランド人を大事にすれば本国の人々に嘲笑われると思ったに違いない。

もう一つは、この時代のアイルランド移民のほとんどがカトリック教徒であったことである。当時のアメリカは独立の中心的存在となったイギリス系移民を頂点に、WASP（White Anglo-Saxon Protestant：白人でアングロ-サクソン系のプロテスタント）絶対優位という構図が出来上がっており、カトリックに対する根本的な偏見と恐れがあった。また、カトリックの国は他にもあるが、ことアイルランドのカトリックというと、「大家族、大酒のみ、だらしない、無知、けんかっぱやい、がんこ」というイメージが強く、その結果「アイルランド系の応募お断り」（“No Irish Need Apply”）という門前払いが横行するようになった。白人でもキリスト教徒でもなく、英語も話せなかった日系移民が比較的早く成功できたのは、その勤勉・几帳面な国民性ゆえとされていることを考えると、アイルランド人に対する先入観と拒否反応的行動は理解できなくもない。大飢饉以降、大量にやってきたアイルランド人を排除すべく、反カトリック、反移民の法案がいくつかの州で可決されたのもこの頃である。

2．4　底辺からの這い上がり

急増するアイルランド系移民への差別と排斥から身を守るために彼らが取った手段は、自分の身は自分で守るというものであった。彼らは底辺での生活に甘んじていたわけではなく、英語が話せることと、数がますます増えていくことを武器に、1860年代から労働条件の改善などを求める運動を開始していた。また、自警団や消防団、相互扶助組織、自分たちのための教会や学校を設立し、これらの組織は苦労を重ねながらしだいに大きなものとなっていったのである。現在もニューヨーク周辺で消防士と警官にアイルランド系の出自の人が多いのは、この当時の状況を反映したものである。また19世紀後半には、アイルランド系の後を追って、ポーランド系、ユダヤ系、南欧系の移

民が押し寄せ、それにより、アイルランド系は自ずとアメリカ社会の中での位置を押し上げられることになった。また、この時代には、市民権がなくとも居住者であれば投票が認められるようになっていたため、数の多いアイルランド系は自分たちの代表を議員として送り出すことに成功した。政治家は支持者からかき集めた資金をもとに収賄や買収を行い、徐々に政界で力をつけていき、アイルランド系全体の地位向上に貢献したのである。アイルランド本土における1880年代の土地法改革や1921年の自治権獲得によって極度に貧しい移民の流入が減少したこともアイルランド系移民全体の生活水準向上の一因となった。1960年には、アイルランド移民4世でカトリック教徒のジョン・F・ケネディが合衆国大統領に就任し、アイルランド系移民の苦難の時代は、一応のピリオドが打たれたのである。以後アイルランド系は多数の著名人を輩出し、現在ではドイツについで、アメリカ第2の民族集団である。その数はおよそ3,800万人、アイルランド全島の人口をもしのぐ数となっている。

3．移民ひとりひとりの経験

前章までは、アイルランドからアメリカへの移民の歴史を概観したが、ついで、移民個人個人の歴史へと視点を移し、ひきつづいて、アイルランド系移民の経験を振り返ってみたい。*Ellis Island Interviews : In Their Own Words* に登場する5名のアイルランド出身者は次のとおりである。プライバシーの保護のため、本名か仮名かは明らかにされていない。それぞれ、インタビューの概略を示していくこととする。

Joseph McGrath	ゴールウェイ州出身	1900年生まれ・1921年入国
Martha O'Flanagan（女）	ロスコモン州出身	1903年生まれ・1925年入国
Marjorie Kellhorn（女）	オファリ州出身	1906年生まれ・1925年入国
Emamuel "Manny" Steen	ダブリン出身	1906年生まれ・1925年入国
Stephen Brady	コーク州出身	1914年生まれ・1927年入国

3．1　ジョゼフ・マックグレイスのケース

（概略）生家はゴールウェイ州の農家で、父は自分の土地を所有し、一家は食べるのに苦労するほどではなかったが、概して貧しかった。我々はゲール語を話すカトリック教徒だった。19歳のとき、じゃがいも掘りの仕事をしていた自分に渡米を勧めたのは母親だった。アメリカに住むおじが渡航費用125ドルを送金してくれた。船賃は100ドルであった。リバプールから（カナダの）ハリファックスまでは8日間の旅であった。そこからさらに船はニューヨークへと向かった。2等船室といっても寝台は2段、食事もよかった。ゴールウェイから一緒に出発した40人のうち、メイン州ポートランドまで一緒だったのは2人だけで、多くはボストン、数名がニューヨークに向かった。おじが紹介してくれたミッチェル港の港湾労働に従事していた1,200名のうち、7割がゴールウェイ州出身者であった。

19世紀初頭、大西洋の横断には1ヶ月ほどの日数を要したが、同世紀の末には約2週間にまで、短縮された。さらにここにもあるように、1920年代には8日にまで短縮されている。蒸気船の登場や

造船技術・通信手段の発達が背景にあることはいうまでもない。先に述べた「棺桶船」（1800年代後半）の時代には、寝台は3段で、しかも各段に数人ずつがつめこまれていたが、1882年に船上の生活条件に関する法律がアメリカで定められ、船上の環境は著しく改善された。まず、乗客1人の死亡につき、船会社は10ドルの罰金を課せられた。また、移民局に足止めになった乗客の滞在費と送還者の送還費用も船会社の負担と定められた。1808年に奴隷貿易が禁止されて以後、移民の輸送は大事な収入源となっていたため、船会社は船上の環境を改善せざるを得なくなったのであった。

3．2　マーサ・オフラナガンおよびマージョリー・ケルホーンのケース

（マーサ・オフラナガン概略）生家はロスコモン州の農家で、一家は食べるものには不自由していなかった。しかし、成長するとイギリスかアメリカに行くのがあたりまえとなっていた。すでに渡米していた長兄が渡航費の200ドルを送金してくれた。コーク港で乗船したが、多くのアイルランド人がボストンを目的地としていた。乗船前、医師の検診があり、自分は手にいぼがあって心配したが、薬をもらっただけで、問題はなかった。8日間の船の旅は快適で、ダンスに明け暮れた。

（マジョーリー・ケルホーン概略）父は蒸留所勤め、母は看護婦をしていた。家は小さかったが当時では中級だった。父は出稼ぎで何度も渡米の経験があった。2人のおじ、2人のおば、2人の姉が渡米しており、自分も渡米のことばかり考えていた。2人の姉はニューヨークで家事手伝いをし、渡航費を送金してくれた。クィーンズタウン（現在のコーブ）で泊まったホテルでは、主人からタイタニック号に乗船した泊まり客たちの話を聞いた。検診では洋服や髪を煙でいぶされた。検診の結果、その場で追い返される者も多かった。8日間の旅の後、ニューヨークの姉のもとへ身を寄せた。電気、水道はもちろんのこと、5つの寝室、2つの居間のあるアパートは、私には夢のようなものだった。自分はメイシー百貨店の仕事を断り、住み込みの子守り兼家庭教師の仕事についた。翌年両親と弟を呼び寄せたが、エリス島では父が病気を理由に拘留された。姉妹で500ドルの保証金を用意したが、それでも足りず、翌日「旅行者援助団体」の人が「見せるだけ」の現金500ドルを用意してくれ、やっと通過が許可された。

エリス島やエンジェル島に多くの者が拘留され、送還者や自殺者もあったことは、先にも述べたとおりである。また、1882年制定の法律により、送還者をできるだけ出さないようにすることが船会社にとっても重要なこととなったため、乗船前にも検診が行われるようになった。移民局は、無一文では通過することはできず、ある程度の金を持参している必要があった。それは、仕事を見つけるまでの間の生活費という意味があった。病気など、トラブルを抱えている者の場合はなおさら、窮乏する見込みはないという意味の保証金を見せる必要があったのである。

また、ケルホーンのインタビューでは、1912年に沈没したタイタニック号のことが言及されている。この客船はイギリスのサザンプトンを出港し、フランスのシェルブールに寄港、最後にクイーンズタウンで123名（うちアイルランド人は113名）の客を乗せたのち大西洋に船出した。アイルランド人のほとんどがアメリカを目指した移民と見られている。ケルホーンがクイーンズタウンの宿で聞いた話というのは、タイタニック号乗船の前にその同じ宿に宿泊した犠牲者についてのものだったのである。アイルランド人113名の死亡率は65％と高い。とりわけ男性は87％の死亡率である。もともと救命ボートは全乗船者数の半数分もなく、ましてアイルランド人が乗った3等船室は船底に近く、出口は施錠されていたのである。当時アメリカの移民法が常時施錠して3等船客を1、2等

船客と分離することを求めていたためである。アメリカや日本では大ヒットした映画も、祖先の悲惨な体験への深い悲しみからか、アイルランドではあまり受け入れられなかったようである。

3.3　エマニュエル・“マニー”・スティーンおよびスティーブン・ブレイディのケース

（エマニュエル・“マニー”・スティーン概略）母はポーランド、父はウクライナの出身で、2人はスコットランドで暮らした後、ダブリンに渡った。我々はIrish Jew（アイルランド系ユダヤ人）であった。ダブリンの家は長屋で、水道はあるが便所はなく、各部屋におまるが置いてあった。1921年、内戦が勃発すると景気も悪くなり、失業率も悪化する一方で、皆アメリカに行くしかないと考えるようになった。当時アメリカでは「息子を大統領にする」と言うところ、アイルランドではせいぜい「息子を銀行支配人にする」と言うぐらい、状況も、希望も違っていたのである。当時エリス島では最低20ドルの所持金を見せる必要があり、自分はなくさないよう靴に入れていた。10日後、ニューヨークに着くと、数百人ずつ渡し舟に乗ってエリス島に上陸した。船上のとばくで所持金を失った者たちに、2ドルの利息つきで20ドルを貸す男がいた。翌日、市内見物に出た自分は、前日降り立ったばかりのバッテリー公園に行き、ホットドッグとアイスクリームを食べて最高の気分を味わった。

（スティーブン・ブレイディ概略）1920年代、アイルランドでは「自由国」を望む者と「共和国」を望む者との対立が激しく、状況は年々悪くなっていた。母はアメリカ、父はニュージーランドかオーストラリアを希望したが、母の親族がすでに移民していたことなどから、結局アメリカへ渡ることに決めた。初めは父と長兄、次は次兄、そして翌年に母と私を含む6人というように、段階的に一家が旅立った。上船前にはノミ退治のため入浴をしたが、そのおかげで、3等客だったにもかかわらず、エリス島には上陸しないで済んだ。船は、ハリファックス、ボストンを経てニューヨークに着いたが、当時、カナダのほうが入国の条件が厳しくなかったので、まずカナダに入国し、しばらくしてからアメリカへ入るという者も多かった。

1878年から79年にかけて、アイルランドはまたもや飢饉に見舞われ、多くの破産者、追放者が出た。アイルランド人の不幸の主たる原因を地主制にあるとみた活動家C.S.パーネルやマイケル・ダヴィッドらの運動はいわゆる「土地戦争」へと発展し、土地における地主の利益を減少させる土地法が1881年に制定された。これにより、地主が手放した土地を小作人らが買い戻すようになり、自分の土地が持てないことに起因する移民は減っていった。しかし、マックグレイやオフラナガンのケースを見てもわかるように、食べるのに不自由しないとはいっても、アメリカでの自由で豊かな暮らしと比べるとかなり見劣りするものであった。

19世紀末以来、アイルランドでは大飢饉とは別の混乱が国を襲っていた。プロテスタントの地主であったにもかかわらず、アイルランドの独立に向けて大きな役割を果たした天才的な指導者パーネルが失脚し、1891年に死亡した後は、急進派の小グループが乱立した。1919年から21年7月までのイギリス＝アイルランド戦争は、ゲリラ戦争の色あいの濃い紛争で、町が銃撃や焼き討ちの舞台となるなどして、一般庶民をもおびえさせた。1921年12月にアイルランド自由国が創設された後も、政情は不安定であった。「自由国」といってもそれは、制限つきのイギリス内の自治地域という意味であり、一独立国家（つまり「共和国」）とは異なるものである。大多数の小作人は、自分の土地が所有できる一連の土地制度改革に満足していたのだが、1916年の武装蜂起の失敗と、それに対する厳しい処罰は国民に大きな衝撃を与え、国全体が独立への気運を高めていくことになった。と同時に、数多くの挫折や失望をも味わうこととなる。北部6州をのぞく南部が共和国としての完全独立

を果たすにはさらに数十年の歳月を待たなければならなかったのだ。アメリカへの移民は1905年をピークに、1910年代から20年代にかけて徐々に減少していったとはいえ、庶民が自由と平和と生活の豊かさを謳歌できるアメリカはアイルランドの人々の目には、依然光に満ち溢れるティル・ナ・ノグの国として映り続けたのである。

20世紀までに700万人のアイルランド人がアメリカに渡ったといわれている。インタビューに登場する5名はいずれも1920年代の渡米者であり、その半世紀ほど前に「棺桶船」に命を託さざるを得なかった人々とはかなり状況を異にしている。しかし、エリス島の移民博物館に展示されているおびただしい数の写真、パスポート、入国記録書などを見ていると、移民ひとりひとりに物語があることを強く思い知らされる。いずれが幸福で、いずれが不幸かなどと、序列をつけることは不可能であり、また無意味であると感じるのである。アメリカの多民族問題や移民問題を考える際、「——系アメリカ人」という言葉でひとくくりにしてしまいがちであるが、移民の歴史は無名、無数の移民ひとりひとりのライフ・ストーリーによって構成されるものであることを忘れてはならない。

[**REFERENCES**]

1. Kerby Miller and Paul Wagner, *Out of Ireand : The History of Irish Emigration to America* (London, Aurum Press Limited, 1994)
2. T.W. Moody, F.X. Martin eds. *The Course of Irish History,* 1994 Revised and Enlarged Edition (Cork : Mercier Press, 1994)
3. Dorothy and Thomas Hobler with an introduction by Joseph P. Kennedy II, *The Irish American : Family Album* (Oxford : Oxford University Press, 1995)
4. Peter Morton Coan, *Ellis Island Interviews : In Their Own Words* (New York : Checkmark Books, 1997)
5. Virginia Yans-McLaughlin and Marjorie Lightman with The Statue of Liberty-Ellis Island Foundation, *Ellis Island and the Peopling of America : The Official Guide* (New York : The New Press, 1997)
6. S.J. Connolly ed., *The Oxford Companion to Irish History* (Oxford : Oxford University Press, 1998)
7. William D. Griffin, *The Irish Americans* (Hong Kong : Hugh Lauter Levin Assosciates, Inc.,1998)
8. Kevin Kenny, *The American Irish : A History* (London : Pearson Education Limited, 2000)
9. 大下尚一 他著『史料が語るアメリカ』（東京：有斐閣、1989）
10. 亀井俊介監修『世界の歴史と文化 アメリカ』（東京：新潮社、1992）
11. 野村達朗『「民族」で読むアメリカ』（東京：講談社、1992）
12. ジョン・ハイアム『自由の女神のもとへ 移民とエスニシティ』斎藤眞他訳（東京：平凡社、1994）
13. ナンシー・グリーン『多民族の国アメリカ』明石紀雄監修、村上伸子訳（大阪：創元社、1997）
14. 野村達朗編著『アメリカ合衆国の歴史』（京都：ミネルヴァ書房、1998）
15. 五十嵐武士編『アメリカの多民族体制 「民族」の創出』（東京：東京大学出版会、2000）
16. 明石紀雄・飯野正子『エスニック・アメリカ 新版』（東京：有斐閣、2000）
17. ジョルジュ・ペレック『エリス島物語』酒詰治男訳（東京：青土社、2000）
18. 松尾弐之『民族から読みとく「アメリカ」』（東京：講談社、2000）

Irish Emigration to America ——Experiences of Irish Immigrants

Kaoru SATO

For these three centuries around seven million people came out of Ireland to America. Every immigrant has his or her own unique story and experience. The general history of Irish emigration consists of such personal life-stories.

The aim of this essay is to take an overview of the history of Irish emigration to America, with the summaries of interviews with five Irish-Americans who came through the immigration station on Ellis Island.